



書店と喫茶店の間、 そこからあふれるもの

片山淳之介

(神保町「無用之用」店主)

「世界一の書店街」とも呼ばれる東京・神田神保町、そこに新しいタイプの書店が登場している。2020年、「飲める本屋」「読める飲み屋(喫茶店)」としてオープンした「BOOK SHOP 無用之用」はその嚆矢。店主の片山淳之介さんに、書店と喫茶店、そのふたつの存在の間にこそ生じる「何か」について聞いた。



神保町・すずらん通り側の看板(2階部分)。ビールと喫茶の間に各種書籍が挟まれたデザイン。

神保町のメインストリート「すずらん通り」に建つビルの二階。入り口は一本裏の通り、人気ラーメン店の行列ができているあたりにある。階段を上って二階へ。

公園の砂場みたいな場所

——「無用之用」という店のスタイル、業態を定義するとどうなりますか？ 看板には「ビール 各種書籍 喫茶」と書かれています。本がビールと喫茶に挟まれた形ですが。

片山 ブックカフェバーということにしていま

すが「飲める本屋」です。それはつまり「読める飲み屋」です。しゃべってもいい本屋さんといったところでしょうか。イメージはずいぶん前からあっていて、公園の砂場みたいな場所なんです。知らない子どもと子どもが砂場の山を作って穴を掘って行って、手と手が当たる。その瞬間、お互いを意識する。そういう出会いの場所になれる。ばいばいと思っっています。

ただ本だけでも人と人が出会わないし、ビールや喫茶のカウンターだけでも出会わない、という実感があって、それで両方にしました。——神保町で開店したのが二〇二〇年六月、昨年二〇二三年八月に同じく神保町内で移転。移転によって変化したことはあるのでしょうか？

片山 カウンターの色も同じです(本誌表紙参照)、変えたこと、変わったことのほうが少ないと思います。お客さんは前の店舗以来ずっと通っていた方プラス新しい方です。——本のセレクトに関してはどうですか？

片山 本を選び方、並べ方も変わっていません。半分はお客さんの選書です。こういう本を並べ

たいというキーワードと本一〇冊のリストをいただいて、注文しています。

お客さんの選書による棚をみると、それぞれのキーワードが並ぶ。

「こういう感じのおせち料理が食べたい」

「幸福の中の甘味」

「エブリデイ梅雨」

「手と頭の中で起こること」

「なんでもない(かもしれない)日々」
などなど。

「エブリデイ梅雨」の棚主は夏見安さん。棚には大森静佳「カミーユ」(書肆侃侃房)、目取真俊「眼の奥の森」(影書房)、三国美千子「いかれころ」(新潮文庫)などが並ぶ。

「つらいときによく本を読んでいます。つらいことがある度に共感できる本が増え、その本に癒されてきました。そういう本はたいいてい暗い本でした。

棚を持たせてもらうことになって、つらいときに寄り添ってくれる本を選ぼうと考えたら、自然と暗い本が集まりました。人生には雨降りが続く時期もありますが、この棚の本が癒しになったり、大変な日々も案外悪くないかもと思ってもらえ